
携帯小説

庄垣彬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

携帯小説

【コード】

N5979H

【作者名】

庄垣彬

【あらすじ】

気軽に読めるはずの携帯小説、でもその小説が人の人生を決めるとしたら・・・

プロローグ

夏の空がどこまでも高く、青い夏の日。

夏休みのある高校は静かな時間が流れていた。

4階建ての校舎の最上階、1人の少女が暇を持て余しながら携帯電話をいじっている。

友達に用事に付き合い学校に来て、終わったら一緒に遊びに行く事になっていた。

「もう、早く帰ってこないかな」

メールを試してみたり、好きなアイドルの記事を読んだりしていたが、それも飽きてきて

「そっだ、この前の続きを」

彼女は携帯に画面に映る文面を楽しそうに読み始めたが、次第に顔色が曇り始め、数分読んだ後

震える体を押さえる様にして携帯を閉じ、そして

「イヤァ」

ガチャーン

携帯を床に投げつけた。

折りたたみ式の携帯は二つに分かれてしまい、画面が真っ黒になり壊れてしまった。

体の震えで、動けなくなった少女、ただ、黒い携帯の画面を見つめていた、その目が次第に見開き、逃げる様に教室を飛び出していった。

そして、激しくガラスの割れる音がしてすぐに、鈍い“ドスン”と言う音がした

静まり返った教室に残された、壊れた携帯の黒い画面に映されていた、赤い文字がゆっくりと消えていった。

(1)

高見今日子は通勤途中の電車の中でいつも小説を読んでいた。

一般の会社の經理をしてる、入社3年目の25歳、独身。

通勤時間は30分程、短い小説なら読み終える時間、今日子はこの時間が好きだった。

雑踏の中でも小説内の世界に入りこめて、自分の世界を作れるから。

「おはよう、今日子」

その朝、同じ会社の同期の木村冴子が今日子の最寄りの駅で声を掛けてきた。

「おはよう、でも、どうして？」

「あはは、昨日ね彼のアパートに泊っちゃって」

「それで、ふうん、やるわね」

電車がホームに入ってきて2人は電車に乗り込んだ。

今日子はいつものように小説を読む事が出来ない事に少し不満だけど、冴子との話も悪くなかった。

「そうだ、今日子って小説好きなんだよね」

急に冴子が聞いてきた。

「うん、好きだよ、いつも会社の行き帰り読んでるし」

「携帯小説は読まないの？」

「携帯小説？」

「そう、無料だし、ジャンルも沢山あって面白いよ」

「でもね、素人の人が書いたものでしょ、興味ないなあ」

「そう、私はたまに見ているよ、結構面白いものもあるから、一度見てみたら、無料だし」

「まあ、気が向いたらね」

駅に着き2人は会社に向かった。

午前中の仕事をこなし昼の休憩時間、食堂で冴子と昼食を取る事にした。

4人掛けのテーブルに向かい合わせで、食事が終わりいつもの雑談をしていると。

「ここ、あいてる」

同僚の増田美智が冴子の隣に座った。

「美智、食事は終わったの？」

冴子がコーヒーを一口飲んで言った。

「うん、美味しく頂きました、ふふ」

今日は美智の事は何となく苦手だ、明るくていい子んだけど、人に心にズケズケと入ってくる感じの子だから。

「ねえ、この間、面白い話を聞いたんだけど」

「面白い話？」

冴子が興味なしって言う振りをしながらも、目が輝いている。

今日は興味が全くない。

「そう、妹にきいたんだけど」

美智の話はいつでも妹発信

美智の妹は高校生、学校で流行っている物や話を美智は時々取り入れている。

「今、携帯小説で噂になっている事があるんだって」

「噂？」

「ある、携帯小説のサイトのある小説を読んだら・・・」

「読んだら？」

「不幸が訪れるって」

「はあ？」

「だから、小説を読んだら不幸になるって言う噂」

「ばからしい、ねえ今日子」

「うん」

今日子は興味なさげに返事をしている。

「もう、信じてないの、妹の友達が実際読んで怪我をしたって」

「怪我したの」

冴子が少しだけ興味をしめす。

「まあ、たいした怪我じゃなかったみたいだけど」

「小説を読んだから怪我したんだ」

「そうよ、きつと」

「きつと?」

冴子の眉がゆがむ。

「うん、読んだって言っても怖くなって最初の方でやめたって」

「じゃあ、小説のせいで怪我したのかどうか分からないんだ」

「まあ、そう言う事ね」

「なぐんだ」

そして、お昼の休憩時間が終わり3人はそれぞれ仕事に戻っていった。

(2)

夕方、今日子は仕事が終わりに定時で会社を後にした

今日子自信、別に真面目な訳ではないのだけれど、誰かに誘われな
い限り大体、すぐに家に帰るほうだ。

冴子や美智は自分から誘うタイプ、今日子は誘われるタイプと言ったところか。

駅に着くと今日子はバックから小説を取りだし電車の来る間に少しだけ読もうと思った。

今朝、冴子に邪魔をされた分を取り返そうと、それに今読んでいる小説はもうすぐ読み終わるところ、帰りに次に読む本を買って帰るつもりでもあった。

電車が到着すると、本を閉じ電車に乗り込む。

帰りに30分、今日も電車は人が多く座る事が出来なかったが、今日子はドア付近の手すりを支えに、片手に本を持って読み始めた。

今、今日子が読んでいるのはサスペンス物、ようやくクライマックスに差し掛かっているところ、ワクワクしながら今日子は読んでいた。

そして、自分が降りる駅の着く少し前にその小説を読み終えてしまった。

「ん〜、ちょっと最後は拍子抜けだったかな??」と批評しながら流れる車窓を眺めていた、その時、携帯の着信があった。

「あれ、誰?」

携帯を取り出すと、冴子からのメールだった。

『今、飲みに来ているんだけど、来ない？いい男もいるよ』

「もう、今頃」

そう呟いて、返信のメールを送る。

『もう、家に着くから、今日はパス』

家に着くからだけじゃなく、本屋により本を選ぶのが楽しみだったから断った。

メールの返信をした後、携帯をバッグに入れようとした時。

「そう言えば、冴子が言っていた携帯小説って」

少し気なり携帯をもう一度開こうしたが駅に到着、携帯をしまい電車を降りた。

改札の抜け、駅前の本屋さんに入っていく。

文庫本の新刊のコーナーで、まずは物色。

「イマイチかな??」

今日子は、気にいった作者はいるけれど、本を探す場合、題名で買う。

もちろん、“失敗”と言う時もあるけれど、それも楽しんでいる。

何より、たまたま買った本が面白いと思った時、今日子の至福のと

きなのだ。

何冊か物色した後、2冊の小説を買う事にした。

サスペンス物と恋愛物、今日子の好きなジャンル、後ホラー系もたまには読んでみたりもしている。

本屋を出て自宅へと続く道を歩いて行く。

途中、商店街がある、昔は賑やかに人の出入りもあつたけれど、今は近くに大型ショッピングモールも出来て、商店街は廃れてきていた。

空き店舗も多く、数件の店がやっているだけで、後はシャッターが閉まっていて、夜なんかは、電灯も点いてなく薄気味悪い道になる。

今日子の自宅は商店街を通れば近道になるけれど、怖さもあつて少し遠回りをして帰る事にしてた、よっぽど急いでいる時以外は。

今日子は親と同居している、その方が1人暮らしより楽だから。

自宅へ帰ると、当然のごとくお母さんが料理を作っていてくれる。

今日子は少しだけ疲れた体で料理の手伝いをする、一応、花嫁修業のつもりで。

家族との食事も終わり、寝るまでの時間、今日子はTVを見たり、雑誌を見て過ごしていた。

ふと、昼間、増田美智が言っていた携帯小説の話思い出した。

「ただの噂だろうけど」

そんな事を言いながらパソコンの電源を入れwebで調べてみる事にした。

『携帯小説』と入力。

膨大なヒット数があり、とてもじゃないが調べる気になれない。

次に『携帯小説の噂話』で入力。

ヒット数は減ったけれど、それでも膨大すぎる。

とりあえず何ページか見てみると。

「ん？」

数ページ目で気になるブログを見つけた。

女子高生が書いているらしいブログだけど、タイトルに。

《読んじやったあ》と書いてある。

「まさかね」

そう思い、でも何気なくブログを見てみる

書いてある内容は絵文字が一杯の可愛い文面、今日子にはまねがで
きないような。

その日にあつた出来事を書いてある。

少し微笑ましく思いながら読んでいた。

そして、最後の文面

『昨日さあ、噂の携帯小説読んでみたけど、聞いた話と違った。なにか騙された気分だよ。』

でね、内容はホラーみたいだったの、怖くなって途中でやめちゃった、キャハ。

噂では、読み終わったら何かが起こるって言っていたけど、最後まで読んでないから分かりませ〜ん。

誰か、最後まで読んだ人いないかなあ、そんな人がいたら、どうなったか教えて・・・』

ブログを読み終えた今日子は

「やっぱり噂って、こんなもんなのね」

そう言っただけで納得してブログを閉じようと思ったが、下に

『一応、これが小説のアドレスです、興味のある人、行ってみてえ』

と書いてあるのに気がついた。

今日子は少し迷ったが、ホラー系の小説にも興味があるのと好奇心がカーソルの矢印を動かしていた。

そしてクリックすると『Not Found』と表示された

「どつ言つ事？」

何度かクリックしてみるが同じだった。

「やっぱりね」

でも、今日子は気になってしまっていた。

それで、携帯にアドレスを転送して見てみる事にした。

携帯に転送されたアドレスに、もう一度アクセスしてみたがやはり繋がらず、今日子はあきらめて眠る事にした。

(3)

次の日、いつものように駅に着き、いつものようにバックから小説を出そうとすると

「あつ、忘れちゃった、そうか、昨日は・・・」

携帯小説の事を調べていて、買っていた小説をバッグに入れておくのを、忘れてしまっていた。

仕方がなく、電車に乗る事にした。

今日はいつもより空いているような感じだ、すんなり座席に座る事ができた。

電車が走り始め今日子は窓の外を見ていたが、何かを思い出したかのように携帯をバックから取り出した。

携帯を開いて、携帯小説のサイトにアクセスしようとすると、昨日のアドレスが気になりもう一度アクセスしてみる事にした。

“あつ、繋がった、昨日のアドレスに”

背景は真っ黒、真ん中に赤い文字で「K」の文字が。

作者の名前は無かった。

「K」の文字の下に「読む」の文字が白い字で書いてある。

今日は、何故か興味がわいてきて少し読んでみる事にした。

“まあ、つままないのなら、やめればいいか”

そんな軽い気持ちで。

白い文字の「読む」と押すと、また、黒い背景に赤い文字が浮かび上がる。

そして、出だしが

『Kはいつものように電車に乗り会社に向かっている……』

から始まっていて、読み進めていくと、他愛のない内容なんだけど不思議に読み進めてしまっていた。

そして、ある所で目が止まる

『偶然、学生の時、好きだった男に出会う』と書いてあった。

そして、先を読み進めようとした時、座っている今日子の前に影が
でき

「高見さん？高見さんだよね」

「えっ？」

今日子は声のする方を見上げ

「あっ、神谷くん？」

「そう、神谷、覚えていてくれたんだ」

そこに立っていたのは、大学時代の同級の神谷俊介だった。

「高見さんはいつもこの電車？」

「うん、神谷君は？」

「おれ、異動になってこの電車」

神谷俊介は大学卒業後に入った会社で違う街で働いていたが、最近
この街に異動になった。

俊介は細見のすらっとした体系で男前、大学生の頃はモテていた。

今日子は、大人しい性格、俊介とは共通の女友達を介してしか話を
した事がなかった。

すぐに今日子の隣の座席が空き、俊介が座って2人は話しを始めた。

今の状況、大学時代の事、共通する友達の事などに花を咲かせた。

今日子にとって、短い出勤時間になった。

駅で俊介と別れる時にお互いの電話番号とメールのアドレスを交換して今日子は電車を降りた。

今日子が会社に着くと、タイミングよく俊介からのメール

『さつきはどうも、仕事がんばって』

今日子は少し微笑んで、返信メールを送る。

『こちらこそ、どうも、神谷君も仕事がんばってください』

携帯を閉じる

今日子はときめいていた、今、付き合っている彼氏はいないし、最近こんな気持ちになる事もなかった。

2年前、冴子に強引に付き合い合わされて合コンに行った時、ある男と気が合い半年ほど付き合った事はあったがそれ以来、付き合い合った男はいない。

それに、明るい性格でもないし、それほどモテル方でもない。

積極的にいけない自分に時々歯がゆさも感じる事もあった。

俊介と偶然の再会、何か運命的な事と自分で思っていた。

昼、冴子といつものように食堂に行く

「今日の、今日子、何所か違うよね」

「な、なに、いつもと同じだよ」

冴子のいきなりの問いに戸惑う今日子

「そう、かなあ」

「そっだよ、いつもと何も変わらないよ」

「なんだか・・・」

冴子は今日子の表情が少し明るくなったように思ったが、言わない事にした。

2人で食事をしていると、美智が近づいてきた。

「こんにちは、お二人さん」

そして、今日子を見て。

「あれ、今日子、お化粧変えた？」

「何も変えてないよ」

「そうかなあ、何か明るくなったように見えるけど」

「そうかなあ」

美智と今日子のやり取りを見ていた冴子が

「今日子、もしかして男できた？」

「そ、そんなの居ないよ」

「ほんと、でも、昨日までの今日子と違うよ、ねえ、美智」

冴子が美智の同意を求めると。

「ほんと、男できたでしょ？」

冴子と美智の追及が続くが

「そ、そんな人いないって、本当に、ただ、大学時代の友達に偶然会っただけだよ」

焦りながら今日子言った。

「友達ねえ、ふっん」

含みを残しながら冴子と美智が言った。

(4)

昼の休憩も終わり、昼からの仕事に専念する。

午後の3時頃、今日子は休憩室に休憩しにきていた。

コーヒーを飲みながら携帯のメールをチェック。

俊介からのメールは無い。

「そつだよね、仕事中だもんね」

一人でつぶやいて、そして

「そつだ」

携帯小説の続きを見てみる事にした。

『偶然出会った2人は、その日の夜、食事をする事になった、そして・・・』

ブー・ブー・ブー

メールの受信。

「神谷君から」

今日子の気持ちが高揚していくのが自分でも分かった。

『今夜、お暇ですか、食事なんてどうだろう』

“えっ?”

今日子の驚いた、小説の書いてある通り・・・“まさか”

“そんなの、偶然だよ、そう偶然、偶然”

そう自分に言い聞かせてメールの返信をする事にする。

『いいですよ、会社が終わったら連絡します』

何故か少しドキドキしている自分に驚いていた。

そして、すぐに返信が来た。

『ありがとうございます、じゃあ、連絡まっています』

俊介の返信に嬉しくなり微笑んでいると

「なに、携帯見てニコニコしているの？」

冴子が今日子の姿を見て言ってきた。

今日子は携帯を急いで隠して

「な、何も無いよ」

「男から？」

「だから、そんなんじゃない」

「いいじゃん、今日子も女だし、恥ずかしい事でもないし、頑張れ」

「うん、ありがとう」

冴子の優しい言葉が今日子は心から嬉しかった。

夕方に今日子と俊介は会い、食事に出かけた。

高層階のレストラン、都会の夜景が雰囲気をつくり、2人の気持ちを盛り上げる。

同じ階のバーで少しお酒を飲みながら、静かに話をした。

今日子にとって、最高に幸せと思える夜だった。

帰り際、2人は酔いをさましながら、街を歩いていた。

今日子は“この後どうなるんだろう”と期待と不安が入り混じった気持ちでいる。

「高見さん」

沈黙の後の俊介の言葉に

「えっ、あっ、何？」

「今日は付き合ってくれて、ありがとう、楽しかったよ」

「う、うん、私も」

「よかったら、これからも会ってくれないかな？」

「えっ？」

待っていた言葉が今日子の耳に入ってきて少し涙が流れそうになる。

「うん」

そう言うのが精いっぱいだった。

そして、2人は抱き合い、優しくキスをした。

人影もまばらな街角、街灯の下、明りがスポットライトの様に2人を照らす。

今日子は映画の中のヒロインの様な気持ちになった。

そして、2人は離れ、しばらく見つめ合った。

「今日は、もう」

俊介が言う

「えっ?」

意外な俊介の言葉に戸惑う今日子に

「明日も仕事だろ、だから今夜はもう帰らなきゃ、君の親も心配しているだろうし」

今日子が時計を見るともう11時を指していた。

「そう、そうね」

少し残念に思っただけ、俊介の優しさが嬉しくて、素直に帰る事にした。

タクシーをひらい2人で乗りこむ。

帰る道は少し違っただけ、俊介が送ってくれた。

今日子の家の前にタクシーを着け、今日子が降りタクシーが走り去る。

その、テールランプが消えるまで今日子はタクシーを見送っていた。

自分の部屋に入り、今日の事を思い出す。

なんだか嬉しくなって、自然に笑顔になる。

「さて、寝ようかな、明日も仕事がんばろう」

そう言って、時計を見ると12の数字をさしている。

ブー・ブー・ブー

携帯が着信を知らせる。

“誰から？神谷君？”

送ってきた相手の表示を見ると

「だれ？」

知らないアドレスからの着信だった。

そして、メールの題名を見ると

『小説の更新のお知らせです』

そう書いてあった

「更新？」

メールを開くと

『読んでいただいて、ありがとうございます。小説「K」本日分の更新のお知らせです』

「小説の更新って、そんなの送ってくるの？でも、どうして私のアドレスわかったの？気持ち悪いよ、ほんと」

そんな事を言っけていても、今日は次の話が気になり始めていた。

「うーん、少しだけなら」

そう言っけて小説のサイトに繋いで読み始める

『幸せの始め』

章題が出てきた

『出会って、2人はお互いの気持ち確かめあう様に毎日会ってい

た。時々すれ違い、時々喧嘩、そんな事も2人にとってはすべて幸せにおもえる……』

その後は、毎日の出来事や会話、今日子はニコニコしながら読んでいた。

「あつ、もうこんな時間」

時計はもう午前2時を指していた

「もう寝なきや」

今日子は携帯を閉じてベッド入る、すぐに静かに寝息をたてた。

次の日の朝、電車に乗り込むと俊介がすでに電車に乗っていて笑顔で迎えてくれた。

その日から、2人での通勤が始まった。

(5)

半月が過ぎた頃

「ねえ、今日子、美智、見てないよね」

「ああ、そう言えば、冴子は連絡していないの？」

「うん、ちょっと忙しくて、今日は」

「そう」

美智の部署の知り合いに聞いてみると3日前から無断欠勤しているらしかった。

「どうしたんだろうね、風邪でも引いたのかな？」

冴子が心配そうに言うと

「今日、家に行ってみる？」

「今日子、美智の家、知っているの？」

「知らないけど、人事に聞いたら分かるでしょ」

「そうね、じゃあ行ってみるか」

2人は人事部に美智の住所を聞いて会社が終わり次第行ってみる事にした。

美智の家は会社の最寄りの駅から3駅行った街に住んでいた。

駅を降りると、賑やかな繁華街が広がっていて

「美智が住みそうな所ね」

冴子が苦笑いをしながら言った。

駅から10分程歩いた。

「この辺だよ、この住所」

メモに書いてある住所を見ながら今日子が言つと

「これじゃない？」

冴子が2階建てのアパートを指さす。

どこにでもあるようなアパート、道路から奥に部屋が並んでいるよ
うだ。

全部で8部屋あり、美智の部屋は2階の一番奥にある。

2人はまず美智の携帯に電話を入れてみる事にした。

「だめだ、出ないよ」

冴子が不安そうに言う。

「行ってみよう、部屋まで」

そう言つて2人は手前の階段を上がつていった。

美智の部屋の前まで来て《増田美智》の表札の名前を確認する。

部屋の明かりは点いていないようだ。

「いないのかなあ」

冴子はなお不安そうに言った。

今日子は部屋のドアを叩いてみる。

中からの返事は帰ってこない。

そして、ドアのノブに手をあて回してみると

ガチャ

「開いてるよ、冴子」

「どっする？ 今日子」

今日子は一度握っていたドアノブから手を離れた

「何かあったら・・・」

今日子の脳裏に嫌な予感がよぎる。

「入って見よう、もしかしたら倒れているかもしれないし」

冴子が何か複雑な顔で言う。

「だけど、勝手に入ったら」

今日子は戸惑っていたが

「そうね、入ってみようか」

今日子はドアノブに手を掛け回す。

「ふう〜」

大きく息をついて少しづつドアを開ける。

顔が入るくらいまでドアを開けた時

「わっ」

嫌な臭いが今日子の鼻にこびりついた。

「何、この臭い」

冴子がハンカチを取り出し鼻を押さえながら言う。

開けたドアの隙間から

「美智、美智、いる？大丈夫？」

今日子が声を掛けてみるが返事が帰ってこない。

冴子が今日子の後ろで心配そうにしている。

「開けるよ」

今日子が言うと

冴子が黙ってうなずいた

キィー・キィー

甲高い音を上げてドアが開いていく。

部屋に溜まっていた嫌な臭いが2人の体にぶつかり部屋の外に逃げて行った。

今日子もハンカチで鼻を押さえた。

部屋の中を覗く、玄関を入るとすぐにキッチンみたいに思えた。

流し台の前の窓ガラスに掛けてある薄いカーテンから入って来る外光で、かすかに分かるくらい薄暗い。

「暗いね」

「うん」

2人の会話はほとんど無い、不安が2人を覆っている。

キッチンにはテーブルがあり、飲んだ後であるうごっぴが1つ置いてあるだけだ。

電気をつけようと蛍光灯のスイッチを入れる。

カチカチカチ

電気が点かない

「電気、点かないよお」

「電気切れているのかなあ」

さらに不安になる2人は奥の部屋に入って行く。

奥の部屋は窓のカーテンも閉められていて、真つ暗な状態でよく見えない。

今日子は不思議に思っていた、明るくおしゃれな美智が住んでいたようには思えないような、普通のアパート。

“派手な性格にだけど、内面は素直なのかも”

不安な気持ちの中でそんな事を今日子は考えていた。

奥の部屋、暗がりの中でも10畳ほどある事が分かった。

今日子は足元を気をつけながら、カーテンを開けに窓に向かっていった。

冴子はそんな今日子の行動を部屋に縁で黙って見ている。

窓に向かっていている今日子は左側にベッドを一瞬見て嫌な感じがして、急いで窓に向かい、カーテンを思い切り開け、部屋の中の見て呆然とした。

「キヤー」

冴子の叫び声が室内に響く。

部屋の中は雑然としていて泥棒が入ったみたいに荒れている。

そして、ベッドに真つ赤に染まった服を着ている人間の様なものが横たわっていた。

「じ、じ、じ、じ」

今日子は言葉が出てこない、今にも体が崩れそうになるくらい震えている

「イヤァー、美智、美智」

冴子の叫び声で今日子は初めて横たわる者が美智だと分かった。

「み・ち」

今日子は崩れるように、その場に座り込み横たわる美智を凝視するしかない。

ベッドに横たわる美智は、ピンクの寝巻を着ていて、胸元がどす黒くなっている。

美智の体の下、シーツも体を包むように赤黒いものが広がっていた。

そして、顔は、血の気失せ青白く、何かに怯えるように目を見開いて、口も叫び声を今にも上げそうなくらい開いている。

今日子は恐怖で動かない体を何とか這うようにして冴子の所まで行く。

「さ、冴子、冴子」

泣きそうになりながら冴子と抱き合つと、冴子の体も大きく震えていた。

「今日子、美智が、美智が」

「どうしよう、冴子」

2人は恐怖のあまり動けなくなってしまった。

ガチャ、ガチャガチャ

隣の部屋の玄関の開く音がした。

今日子は思わず

「誰かあ、誰か来てえ」

悲鳴にも似た声で叫ぶ

ダッ、ダッダッ

早足の足音が美智の部屋に近づいてくる。

そして

「どうしたあ」

その声とともに、玄関のドアが勢いよく開いた。

「助けて、警察、警察を呼んでください、お願いします」

今日子が泣き叫びながら男に言うと、男は携帯で警察に電話をした後、今日子たちに近寄ってきて、美智も無残は姿を目にする。

「わぁ」

男は驚いて腰を抜かしたがすぐに

「と、とりあえず、外にしよう、警察呼んだから」

「う、うん、ありがとう」

今日子は何とか男の言葉に答えたが、冴子は動く事も話をする事もせず、ボーっと無残な姿の美智の方をただ見ていた。

今日子と男で何とか冴子を部屋から連れ出して玄関のすぐ脇に座らす。

「どっ、どっ言うことなんだ」

男が不審な目で今日子に言うと

「分からない、分からないの、なにがなんだか」

「そう、もうすぐ警察がく……」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきて、だんだん近づいてくる。

「もう、来たみたいだね、大丈夫かい」

男は優しく今日子に話かける

「はい、大丈夫です・・・」

「彼女は、ショックを受けているみたいだけど」

「うん・・・」

今日子は頷く事しかできない。

しばらくするとパトカーがアパートの前に数台止まった音が聞こえ、数人の走る足音が今日子達の方に近づいてきた。

4人の警官が来たようで、2人が今日子達に、後の2人が部屋の中に入っていった。

警官の無線の声が無機質に今日子には聞こえていた。

今日子と冴子、そして美智の部屋の隣の男は事情聴取を受けるためパトカーに連れていかれた。

「ごめんなさい、こんな事も巻き込んでしまった」

今日子は助けしてくれた男に礼を言う

「いえ、とんでもないです。それにしても・・・お友達なんですか？」

男が優しく言った。

「はい、会社の友達・・・」

そう言い掛けて、言葉をつまらした。

パトカーに近づく

「本当に、ありがとうございました」

今日子が最後の男に頭を下げて、警官に導かれパトカーに乗り込んだ。

冴子は泣きながら今日子の後に乗り込む。

もろもろの事情を説明した

無断欠勤をしているために、様子を見に来たとか、部屋に鍵は自分達が来た時には既に開いたとか、部屋の中は真っ暗で、カーテンは今日子が開けたとか、不審に思っている警官に今日子は必死に説明していた。

その横で冴子は泣きやんでいたが、ボーッと焦点が合っていない目で窓の外を見ていた。

数十分、警官から事情聴取を受け2人はようやく解放された。

パトカーから出た今日子と冴子は、アパートに前で座り込んで様子を見ていた。

「冴子、大丈夫？」

「……うん」

「帰る？」

今日子が聞くと、小さく首を横に振った。

「でも、帰った方が、私、残っているから」

「大丈夫よ、私も、私も残ってる」

少しヒステリック冴子が言った。

今日子達が残っている理由は、どうして美智があんな状態になったのか、原因が知りたかったからだ。

少しするとパトカーが次々と来て、アパートの前は数台のパトカーと一台の救急車で埋め尽くされていた。

その周りに沢山の野次馬が興味津々の目で見ていて、数人は携帯で電話を、数人は写メを撮っている。

今日子はそんな光景を、寂しく思って見ていた。

しばらくすると、警官の動きが慌ただしくなり始め

「もう一体、ありました」

そう、無線で話している警官の声に今日子は気がついた。

今日子は無線で話していた警官に近づいていき

「どう言っ事ですか、もう一体って」

「それは、まだ教えられない」

そう言って警官が立ち去ろうとした時

「教えられないって、知り合いなんですよ、教えてください、どう言っ事なんですか？」

必死に食い下がる今日日に観念した警官は

「遺体の合った部屋の押し入れに、女子高生の遺体があつたんだ」

「女子高生？誰なんですか？」

「身元はまだ分からないけど、そっちは形跡から見て自殺じゃないかと言っ事だよ」

「自殺？」

警官の言った事に、訳が分からなくなつてしまった。

「それじゃ、君達はもう帰つた方がいいよ、遺体はどちらにしても検死に回るし、その後は遺族に引き取ってもらうから」

「でも」

「いつまでも、ここにいたら、マスコミのいい標的にされるだけだ」

警官は指をさした。

その先には、TVカメラを持った一団がアパートを撮っていた。

その脇で、レポーターらしき男がマイク片手に何か必死に話をしている。

「今なら、まだ向うも気がついていないし、行った方がいいよ」

警官は優しく言い

「こつちから行けばいい」

そう言つて2人を誘導するように人垣から連れ出してくれた。

そして少し離れた所、人影の少なくなった所で

「ここから帰ればいい、気をつけて帰ってくださいね。それから、また事情を聴く事もあると思うんで、その時はよろしくお願いします」

警官はそう言つて現場に戻つていった。

「大丈夫、冴子」

「うん、もう大丈夫」

冴子はショックから少し立ち直つていて、目はしっかりと今日子を見て言った。

「さっきの警官優しかったね、今日子」

「うん、そうだね」

2人は警官の優しさに救われた。

駅へと向かう道のり、すれ違う人、同じ方向に歩く人々から美智の事件の話が聞こえてくる。

「2人だって、死んだの」

「そうなの、殺されたのかな」

「そうらしいよ、強盗か何かに襲われたかも」

とか

「自殺じゃないみたいだぜ」

「えっじゃあ、殺人？」

「ああ、女が2人殺されたって」

「へえ、若い女？」

「みたいだぜ」

そんな会話が今日子と冴子の耳に否応なしに聞こえてきて、2人は胸を締め付けられる思いで、駅に向かっていった。

駅の構内、2人は無言で電車を待っていた。

「どうして、美智があんな目に、どうして」

冴子が泣きそうになりながら言う

「ほんとう、どうして美智が・・・でも、もう一人って誰だろう」

今日子はもう1人の遺体の事が気になっていた。

「そんなの、誰でも、誰でもいいよ、美智が、可哀そうだよ」

「そうだけど」

構内に電車の到着のアナウンスが流れて、電車がホームに滑り込んできた。

ブー・ブー・ブー

今日子の携帯電話が震えた

「ごめん、冴子先に帰って」

「うん、それじゃ、明日会社で」

「うん、気をつけてね」

「それじゃ」

冴子は電車に乗り込んだ、不安げな表情で。

携帯に俊介の名前が表示されていた。

「もしもし、俊介さん」

今日子の声が少し曇る

「ごめん、仕事中だった？」

「大丈夫、仕事はもう」

「そう、でも、元気がないね」

「うん……」

「何かあった？」

俊介の言葉に今日子は涙がでそうなるけれど

「大丈夫、何も無いよ」

「そう、じゃあ、今晚食事でもどうかな？」

「う、ごめんなさい、今夜は」

俊介と会ったら泣き崩れて頼ってしまっただろう。

それでも、いい。

その方が少しは気持ちが楽になるだろうけれど。

「そう、仕方ないね、じゃあ、また今度にするよ」

「ごめんなさい」

今日子申し訳なさそうに電話を切った。

家に帰り、食事をする気になれず、自分の部屋でぼーっとしていた。

考えるのは美智の事、そして、もう一つの遺体

ニュースをしていないかと思い、TVを点けてみると、芸人が何人か出ているお笑い番組に最中だった。

「はあ」

今日子は気がまぎれると思い、チャンネルをそのままにしておく事にして、ボーっとTVを見つめていた。

お笑い番組が終わり、数分間のニュースの時間になる。

今日子は緊張の面持ちでTV画面を見ていると、美智のニュースが流れた。

そして、流れてくる映像、そして音声に今日子は言葉を失った。

内容は

《被害者の増田美智さんは、増田美智さんの妹、高校2年生の増田

美佐子に殺害されたとの事、そして、美佐子はその場で自殺、押入
れで遺体が発見された、警察は、詳しい原因はまだ捜査中、家族か
ら事情を聞いていると発表したらし》

TV画面に映る2人の顔の写真、今日子は信じられない表情で動く
事が出来なかった。

やり切れない思いだけが、今日子の心を駆け巡っている。

「どうして、どうして」

それ以上の言葉が出てこない。

携帯が鳴る、冴子からの電話だった。

泣きじゃくる冴子、今日子も一緒になって泣きながらお互いを慰め
ていた。

そして、夜の12時、メールの受信の着メロが鳴る。

『小説の更新のお知らせです』

前回と同じ文面、内容も

『読んでいただいて、ありがとうございます。小説「K」本日分の
更新のお知らせです』

「今日は、もう」

こんな時に小説を読む気になれず、今日子は内容だけ見て携帯を閉

じて、眠る事にした。

ベッドに入っても眠る事なんてできない、美智の姿、そう、ベッドに横たわり血まみれの姿が目を閉じるとよみがえってくる。

しかも、妹の美佐子の顔写真も今日子の脳裏にこびりついて離れない。

ウトウトし始めると

ガバツ

ベッドから飛び起きてしまふ、嫌な夢を見てしまつたためだ。

なんども、なんども、繰り返し、美智の血まみれの顔、体、見開いた目が妙に白く、今日子を睨みつけている。

「どうして、美智、どうして、何があつたの、美智」

今日子は枕に顔をうずめ、声を押さえるように泣き朝を迎える事になつてしまった。

(6)

会社に向かう電車、寝不足と泣いた後の顔で俊介と会いたくなくなつたため1つ早い電車に乗る事にした。

メールで俊介に知らせる事に

『おはよう、ごめんなさい、事情があつて今日は早目の電車に乗る

事にします。詳しい事は、今度話します。それじゃ、仕事がんばってください』

電車の中でメールを打って

「はあ」

1つ溜息をついた。

携帯を見つめる。

メールの受信欄、昨夜の小説の更新のお知らせメールに目がいった。

小説を読もうかどうか迷ったけれど

「今日は読む気が起こらない、やっぱ」

そう呟いて携帯を閉じてバッグに入れた。

車窓の景色、“いつから見えていないだろう”そんな事を考えてポーンと窓の外を眺めていた。

会社に着くとさすがに騒ぎになっていて、冴子は更衣室から出る事が出来ないでいる

「おはよう、今日子」

「はよう」

今日子が更衣室に入ると冴子が近寄ってきた。

「待ってた、今日子の来るの」

「そう、そうだよ、私も1人だったら・・・」

「一緒に行こう」

「うん」

今日子が着替え終わり2人は一緒に自分達のオフィスに向かった。

オフィスに着くと上司からさっそく呼び出しがあり人事部に行く事になった。

人事部では、昨日の事を根掘り葉掘り聞かれ、2人が事件に関係のない事を確認させられ。

解放されたのが昼前、今日子も冴子も疲れ果てていた。

そして、会社に電話が。

警察からだ。

事件の事で、2人に聞きたい事があると言う事で警察署まで来てほしいとの事だった。

2人は昼を会社の食堂で済まし、早退扱いで警察署に行く事になった。

昼、今日子は俊介に電話をしてみた。

「もしもし」

「どうした、なにかあったのかい？」

「うん、ちょっと」

「何があったんだい、話してくれる」

今日は昨日起こった事件の事を話した。

「そ、そんな事が」

話を聞いた俊介は絶句してそれ以上に言葉が出なかった。

「でも、どうして昨日話してくれなかったんだ」

「ごめん」

「おれ、信用されてないのかな？」

「そんなんじゃない、そんなんじゃないの、ただ」

「ただ？」

すぐ横で冴子が時計を指さして時間だと知らせている。

「ごめん、行かなきゃ、これから警察に行くの、事情聴取を受けに」

「そうか、仕方ないね、今度ゆっくり話そう」

「うん、そうしましょ、じゃあ」

「ああ」

今日子は電話を切り

「はあ、だめね、私」

そう言って食堂を出て、警察署に向かう事にした。

警察の事情聴取は今日子と冴子、別々におこなわれた。

2人が矛盾した事を言っていないかどうかの検証。

美智の部屋に行った理由、中に入った時の状況、遺体を発見した時の事など。

2時間程の質問攻め、第一発見者として、しかも、殺人事件だと言
う事で時間がかかった。

「それでは、これで、終わりです。ありがとうございました。高見
さん」

刑事は事務的な言葉使いで今日子に言った。

「あのお」

「はい、なんですか？」

「犯人は、妹さん？」

「そうですね、まだ捜査中なんで詳しい事は」

「そうですねか、それじゃ、もう一つ、妹さんは自殺なんですか？」

「そうです、検死結果では」

「原因は？」

「それも捜査中なので」

「分かりました、ありがとうございます」

「お疲れさまでした」

取り調べ室の様な部屋を出た今日子、部屋の前で待っていた冴子と警察署が出る。

「今日子、どうだった、事情聴取」

警察署を出てすぐに冴子が聞いてきた。

「うん、きっと冴子と同じ事、聞かれたよ」

「そっだよね、きっと」

「それにしても、疲れたよね、何か食べて行く」

「うん、そっだね」

2人は近くの喫茶店に入って一息つく事にした。

店はさほど広くはないが静か、夕方前と言う事もあるのかお客は少ない。

窓際の席に向かい合わせて座り、今日子はコーヒーとサンドイッチ、冴子はレモンティーとサンドイッチを注文した。

「ねえ、今日子、美智の事どう思う?」

「どう思うって、分からないけど、妹さん・・・」

今日子は何か言い掛けてやめた

「美智の妹が犯人だって、どうしてかな、仲が良いって言ったのに」

冴子が沈みがちに言う。

「どうしてだろうね、ほんと、何があっただらうね」

それから2人は考えこむように沈黙し、運ばれてきたサンドイッチを食べ始めた。

2人は駅前まで来て

「これから、彼氏と会うから、私はこれで」

冴子が少し明るく言う

「そう、じゃあ、また明日」

「うん」

そう言つて2人は別れた。

今日も携帯を手に取り俊介に電話をしようと思ったけれど、まだ夕方、メールで済ます事にした。

『今日のごめんなさい、今、帰るところです。また連絡します』

送信・・・

「はあ、もつといい言葉が書けないのかなあ、私」

溜息をつき駅に向かった。

電車に乗り自宅へ帰る途中、昨夜の更新の事を思い出した。

通勤時間にはまだ早い時間、電車の乗客は少なく、すんなり座る事ができた。

昨夜の更新のメールを思い出し、携帯を開いてメールのチェックを試してみた。

『読んでいただいて、ありがとうございます。小説「K」本日分の更新のお知らせです』

あたり前だけど、昨夜見た文面と同じ、そして文面を下にスクロー

ルする。

「えっ？」

『もう、このストーリーは止められません、あなたが、読むことをやめたとしても』

そんな事が最後に書いてあった。

「どう言う事？どうしてこんな事を書いているの？」

今日子は不思議に思った。

携帯の中の小説、不特定多数の人が読んでいるはず、それなのにこの文面は。

「はっ」

今日子は感じてはいた、俊介との出会いと小説が似通っていた事、2人の行動もストーリーに沿っていた事、それが楽しみで小説を読んでいた事も。

「この、小説って私のストーリーになっているの？」

今日子は初めてこの小説が怖くなってきた。

そして、震える手で、恐る恐る小説のサイトに繋いでみる。

そこには更新された小説の章題が載っていた。

『友達の死』

震える体、とめどなく流れる涙、今日子は前回更新分を読み進めて行く。

そこには美智の死、その原因が細かく書いてあり、今日子と冴子が発見するところまで、そう、自分達が見た光景そのまま、記載されていた。

「こんな事、こんな事ってありえるの、嘘よ、こんな・・・」

思わず声を出して叫んでしまった。

駅に着き電車を降りる。

外は今にも雨が降りそうな雰囲気、黒い雲で覆われていた。

そんな事も気にする事も出来ず、今日子は自宅への道のりを歩いていた、うつむきながら。

バッグに入っていた携帯電話が鳴りだす。

「もう、嫌あ」

携帯のメールを見る気にもなれない。

でもそれは、電話の着信だった。

着信の相手を見ると俊介だった。

今日子は気が向かないが電話に出ると

「ごめん、どうしても話がたくて、今、いいかい」

「うん」

俊介の優しい声、今日子は今にも泣きそうになる。

「大丈夫だったかい」

「うん、大丈夫」

「そうかよかった、落ち着いたら食事に行こう」

「そうね、ありがとう」

電話を掛けながら歩いている今日子の頬に一粒の水滴が流れて落ちた。

そして、大粒の雨が降り始め、今日子は気にもしない風に電話を耳にあてたまま歩いていった。

(7)

数日間、事件も無かったかのように会社は動いていた。

今日子と冴子は気持ちの整理もつかないまま、働いていた。

「高見君、明日、増田君のお通夜があるそうだ、行くかい」

「そうですね、行きます」

「分かった」

美智のお通や、お葬式が遅れておこなわれる事になった。

殺人と言う事で、捜査、検死などで遅れてしまったからだ。

そして、妹の美佐子の葬儀は別の日にひっそりとおこなわれる事になっているようだ。

お通夜の日

今日子と冴子は、会社をお昼に出て美智の実家に行った。

自分達に手伝える事が無いか、少しでも手伝えたいと言う思いで。

美智を実家に着くとやつれたお母さんが対応してくれた。

今日子と冴子が深く挨拶をして。

「あの、私達に手伝える事無いですか？どんな事でもしますから」

「ありがとうございます、でも」

元氣のない声のお母さん、精神的に疲れているようだった。

「私達、友達だったし、お手伝いしたいんです、それに、今日、明日は大変でしょうから少し休んでいらしてください」

「そうですね、ありがとうございます、それじゃ」

そう言ってお母さんは今日子達に手伝ったもらう事にした。

家は普通の2階建て、1階に応接間、リビング、夫婦の寝室があるようだった。

応接間に葬儀屋が祭壇を綺麗に飾っていて忙しそうに動いている。

そして親戚らしい人たちが打ち合わせをしているのか、リビングに集まって何か話をしていた。

そこに、今日子と冴子が案内され話の中に入る事になった。

お通夜の準備は葬儀屋と親戚が行い、今日子と冴子は受付をする事になった。

夕方から始まったお通夜は、滞りなく行われ、午後10時過ぎには、訪れる人もほとんどいなくなった。

「お疲れさま、もういいよ、後は僕達が、奥で休んでください」

美智の親類の男性2人が今日子と冴子にそう言った。

「そうですね、それでは、お願いします」

そう言って2人は家の中に入っていった。

2人が応接間に入ると、お父さんと親戚が数人、話しをしている。

「お疲れさま、こちらで休んでください」

お母さんがリビングに2人を呼んだ。

リビングには誰もいなくて、テーブルに腰を掛けるとお母さんがお茶を用意してくれた。

そして、美智の思い出話を3人で話し始めた。

美智の子供の頃の事、学生の頃、そして会社での美智の事、悲しさが積もる中で。

「おかあさん、美智さんの部屋見せていただいていいですか？」

今日子がどうしてか、美智の部屋を見たいと思って、お母さんに聞いてみた。

「いいですけど、でもどうして」

「生前、会社での付き合いしかなかったもんですから、学生時代どんな人だったのか知りたくて」

「そうですね、でも荷物はあまりないんですよ、美智が出て行ってから整理しましたから、それでよければ」

「はい、いいです」

冴子は不思議な顔で今日子を見ていた。

2階にお母さんを先頭に今日子、冴子の順で上がっていった。

階段を上がると廊下が奥に続いている。

上がってすぐ左に1つ部屋がある。

「この奥の部屋が美智の部屋よ」

廊下の奥の部屋が美智の部屋のようにだ。

美智の部屋の手前に扉が開いている部屋がある。

お母さんの顔が少し曇ったのを今日子は気がついた、どうやら美佐子の部屋のようにだ。

「どござ」

お母さんが扉を開け部屋に招き入れた。

部屋は10畳ほどの広さ、窓際にベッドが置いてあり、横には勉強していたであろう机が置いてあった。

机には写真が何枚か置いてあった。

制服姿の美智が友達と写っている写真、笑顔が可愛い。

他の写真も笑顔で写っていて、明るい性格がよく出ている。

本棚を今日子が見ていると、お母さんと呼ぶ声が1階から聞こえてきた。

「はい、今行きます」

そう言って

「ごめんなさい、ゆっくり見て行ってね」

そう言ってお母さんは1階へ降りていった。

「ねえ、今日子どう言う事？」

「何が」

「美智の部屋を見たいって」

「どうして、駄目？」

「駄目じゃないけど、部屋を見ても・・・」

「まあね、美智の部屋を見ても、思い出すだけだもんね」

「えっ？」

「冴子はここにいてね」

そう言って今日子は美智の部屋を出ていった。

「ちょっと、どこ行くの、今日子」

冴子の呼び掛けも聞かずに美智の部屋の扉を閉めた。

今日子が向かった先は美佐子の部屋。

扉が開いているから中を覗いてみた。

美智の部屋と違って生活感があり雑然としている。

入って向かい側に机があり、左手の奥にベッドが置いてあった。

今日子は机の上に置いてある携帯を見つけた。

恐る恐る携帯を手に取って開いた。

待ちつけに美佐子と友達が笑顔で写っている。

“こんな子がどうして”

悲しい気持ちが増していく。

そしてメールを一件受信している事に気がつく。

震える指でメールのマークのボタンを押す。

数秒後

『あなたの小説「美佐子」の最後の更新のお知らせです』

日付は事件のあった日、それも事件の起こったであろう時間になっている。

今日子はだんだん怖くなってきて手が震えだす。

それでも、“更新”ボタンを押す。

すると

『死』

と赤い文字で大きく書いてあり、画面を下げていくと

『ご愛読ありがとうございます、あなたのストーリーは完結しました』

「そんな、事……でもこれじゃ、どうして美智が死んだのか分からない」

今日子は受信ボックスに戻して、前回更新分を見てみた。

『悲劇』

と題うってある。

『美佐子は彼が最近冷たくなった事が、どうしてなのか原因が分からなかった。』

数日後、美佐子が信じられない光景を街中で目にする、それは彼が自分の姉、美智と腕を組んで楽しそうに歩いて。

後日、美佐子は美智にどう言う事なのか聞いたそうと、美智のアルバイトを訪れる。

そして、美智が彼と抱き合っけてキスをしているところを見てしまった。

美佐子の怒りは頂点にたっし、そして……

今日子はそれ以上読む事ができなかった、残虐な殺害シーンが書いてあるためだ。

「今日子、何をしてるの」

冴子が部屋の外から声を掛けてきた。

「あっ、ちょっと」

そう言って美佐子の携帯を机に置いて部屋を出た

「どうしたの、今日子」

「うん、後で話す、とりあえず帰る」

「う、うん」

今日子の行動を不審に思った冴子だけど、ついて行く。

「おかあさん、ありがとうございます」

今日子は親類と話をしているお母さんに挨拶をした。

「いえ」

「美智さんの学生の頃を見る事が出来てよかったです」

「そう」

「私達、これで帰ります」

「そうね、遅くまでありがとう」

「いえ、明日にまた来ます」

「ありがとうございます、よろしくお願いします」

今日子と冴子はお母さんとお父さんに挨拶をして美智の家を出た。

2人はしばらく無言で歩いていった。

美智の家から大分離れたところで

「今日子、どうして妹さんの部屋に行ったの？」

冴子は疑問に思っていた事を聞いてみた。

「うん、美智がああなった事件の真相が知りたくて」

「真相って、何？」

「仲がいいって言うていたでしょ、美智」

「うん」

「それがどうしてって思って」

「それで、分かったの？」

「はつきりはしていないけど・・・」

「なに？」

「美智が殺された原因は妹の彼氏をとったのが原因みたい」

「どう言う事？」

「妹さんの彼氏が美智と浮気をしたから、もしかしたら美智の方が彼氏を誘ったのかもしれないけど、それを知った妹さんが怒って、そして浮気の現場を見てしまって・・・」

悲しそうに今日子が言うと

「でも、あの部屋でどうしてそんな事まで分かったの、何かメモとかあったの？」

「携帯小説」

「えっ？」

「前に、美智が言ってたでしょ、噂になっている携帯小説の話」

「ああ、読んだら不幸が、とかいうやつ」

「そう、妹さんは読んでいたみたい」

「でも、それってただの噂でしょ」

「それがそうでもないみたい」

「どう言う事?」

「私も分からないけど、小説に書かれている内容が、読んでいる人とリンクしているみたいなの」

「リンクって」

「ストーリーがそのまま現実に進んでいってるみたいなの」

冴子は困惑している。

小説の中の世界が、現実世界とリンクしているなんて、どう考えても信じられる訳がない。

「そんな事ってありえるの?」

「うん、妹さんの携帯に出ていた小説の内容がほぼ一致していたし、それに・・・」

「それに?」

「私も、携帯の小説を読んでいるし、実際その通りになってるから」

「えっ?どう言う事」

「たまたま、携帯小説を読む事になってしまったんだけど、その内容が私の今現在起こっている事にリンクしているのよ」

「えっ、でもそれ・・・えっ?」

冴子は混乱していた。

「これから起こる事は分からないけど、小説を読み始めた瞬間から今まで、ストーリーどうりだし、それに、美智の事だって書いてあった」

「じゃあ、今日子にも同じような事が・・・」

「分からないわ、どうなるか」

「そう、そうだよね、不幸になるとは限らないし、めちゃくちゃハッピーになるかもしれないし」

「そうだね」

冴子の言葉に、少し慰められた。

「ねえ、もし何かあったら言っただけでね今日子、力になるから」

「うん、ありがとう」

次の日の美智の葬儀の時も2人は受付をし、そして美智を見送った。

数日間、美智の死と妹の美佐子の事が頭から離れず、今日子の気持ちには沈んでいた。

俊介とも連絡はしているけれど、会っていない。

そして、携帯小説も読んでいないし、更新のメールも来ていなかった

た。

(8)

ある日、今日子は仕事が終わりいつもの時間の電車に乗った。

小説も読まずただ窓の外を眺めていた。

ふと、窓に映る1人の女性がこちらを見ている事に気がつく。

知らない女性、髪の毛が長いけれど、窓ガラス越しだし顔がはっきり分からない。

でも、今日子を見つめている目が、そう目だけがはっきりと分かるくらい鋭く怖い感じに思えて、今日子はすぐに目をそらした。

“だれ？”

電車が降りる駅についてすぐに今日子は電車を降り小走りに駅を出た。

そして、振り返ってさっきの女性に姿を探した。

「ふう〜、気のせいだったのかな？」

今日子が見た範囲に女性に姿が無く、安心した。

それでも、気持ちが悪かったから早足で家路へ向かう事にした。

商店街の入り口にさしかかる、奥に行くほど薄暗くなっていて、奥

の方に少し光が見える

「どろじょうぶ」

いつもは通らない道、暗闇の恐怖が襲ってくる

「でも、早く帰りたいし、走っていけば・・・」

アーケードになっている商店街、今日子の小走りの靴音が妙に響いて気持ちが悪くなってくる。

ブー・ブー・ブー

メールの着信を知らせるバイブがバッグの中で震え、今日子はドキツツとして足を止めた。

「誰から？」

携帯を取り出す、メールの相手は

『小説、「今日子」更新のお知らせです』

「えっ？今日子」

今日子は目を疑った、読んでいた携帯小説は「K」だったはず、どして「今日子」に。

商店街の真ん中あたり、立ちつくし震えだす体。

今日子は更新のボタンを押そうかどうか迷っていた。

「これ、押したらどうなるんだろう」

恐怖が襲ってくる、どうしていいか分からなくなってきた。

すると、画面が少し動いたように思えた

「えっ？」

今日子の指は携帯に触れていないのに、更新のボタンの色が変わり、勝手に押されてしまった。

「えっどうして？」

画面が小説に変わり

『殺意』

今日子は自然に内容を読んでしまった。

その時

ガバッ

「えっ？」

突然今日子の腕を誰かがつかみ

「キヤー」

店舗間の薄暗い隙間に凄いで引きこまれて行く

「嫌ぁー」

ガシヤーン

バタン

「痛い」

今日は暗い隙間に倒された、そして見上げると、髪の高い女が立っている

「誰？」

無言で今日子を見下ろす女、右手には光る物を持っている

「誰よ、誰なのよ」

「私、あなたを殺す」

「ど、どっして、どっしてよ」

「私の俊介を帰してもらったためよ」

「どっ言う事」

「あなたが俊介をとったの、だからあなたを殺して俊介を取り返すの」

長い髪の毛が顔を隠し、どんな顔をしているのか、分からない、だけど今日子を見下ろす目は見開き、血走っていて殺意をヒシヒシと感ずる。

「やめて、私を殺しても、俊介さんは、あなたにもどらないわ、きつと」

「そんな事、ないわ、あなたがいなければ、あなたさえいなければ」

女はじりじり近寄ってくる。

「いやあ」

今日子は倒れたまま後ずさりしていく

そして

「終わりよ、これで」

女は光る物を持っている腕を振り上げ

「ふふふ」

口元に笑みを浮かべて振りおろした。

「やめろお」

ドスッ

「グア」

今日子をかばうように誰かが覆いかぶさってきた、その者の背中に刃物が刺さり、そして女が驚いて刃物を持ったまま後ずさりした。

「だれ？」

「やめろ、今日子には手を出すな、はあはあはあ」

「俊介？」

今日子はそれが俊介である事が初めて分かった。

「どいて、その子を殺してあなたを、あなたを取り返すの」

女が血の着いた刃物を振り回しながら叫んでいる。

「やめてくれ、お前とは、何も無かつたし、それに、今日子は今日子は・・・グハア」

背中を刺されたせいか、俊介は吐血した。

「俊介、俊介」

今日子は俊介の血に驚いたが、すぐに抱きしめるようにして。

「救急車、救急車を呼んで、救急車を早く呼んでよ」

女の方を見て今日子は叫んだ。

「私、私は・・・いやあ〜」

女は叫んで走り去って行った。

「待って、お願い俊介を、俊介を」

女の去って行った方を見ながら今日子は叫んだけれど誰も、もう居ない。

「だ、大丈夫だった、今日子」

「俊介」

「大丈夫、怪我、してない？」

「私は、大丈夫よ俊介」

「そうか、よ、よかったあ」

「だめ喋らないで」

「俺さあ、分かってたんだ、あいつが今日子に、ゴホッ」

「俊介、だめ喋らないで、お願い」

「これ見て」

俊介が今日子に見せたのは携帯の画面。

そこには、今日子と同じような小説の題名「俊介」と書いてある

「これ」

「そう、俺も携帯小説読んでいたんだ、そして今日子に出会った」

「そんな事って」

「ごめん黙っていて、毎日更新されて、その通りに進んで行く、俺楽しくて、このまま幸せになれると思っていた・・・ゴホッ・ゴホッ」

「俊介、もう、もういいよ」

俊介の口の周りは血だらけ、顔色の青白くなってきた。

「さっき、更新された小説を見て、君が襲われると思ったんだ、だから」

「俊介、ありがとう、もう、もういいよ、話さなくて、いいよも」

「俺、今日子の事、大事に思ってるから、これから・・・ゴホッ・ゴホッ、きょうこ・・・」

俊介の力が力を失い、そして、俊介の眼にはもう暗闇しか映らなくなってしまうた。

「俊介、俊介、お願い、目を覚まして、しゅんすけえ」

商店街の店舗の隙間、今日子の声がむなしく響いていた。

そして、どこからか救急車の音が聞こえてきて、だんだん近づいて

きた。

いつの間にか今日子は走っている救急車の中にいた、横には救急隊員が応急処置をしている俊介が横たわっている。

心臓マッサージをされている俊介、動く気配がない。

今日子は俊介の名前を何度も何度も声がかれる程呼んでいる。

病院に到着して、俊介はストレッチャーに乗せられ運ばれていった。

今日子はただ、待つ事しかできなかった。

救命室の前、今日子は祈るように待っていた、そこに携帯電話の音
冴子からの電話だった。

携帯に出て少し話をして切った。

携帯を閉じ上着のポケットにしまおうとした時。

ブー・ブー・ブー

メールの着信

「えっ？」

携帯の画面を見つめる。

あの小説の更新の知らせ。

恐る恐るメールを開くと

『読んでいただいている小説「今日子」は更新できませんでした』
そう書いてあった。

「どう言う事？」

今日子がそう言った時、救命室の動きが慌ただしくなり始め、今日子は部屋に向かった。

そして、医者が出てきて。

「残念ですが」

その言葉が俊介の命が終わった事を告げていた。

今日子は泣き崩れ、そして倒れてしまった。

エピローグ

数日後

俊介の葬儀が行われ、今日子も参列した。

親族、会社関係、沢山の人が参列している。

今日子は俊介の死んだ後、警察に呼ばれた。

事情聴取で呼ばれ一応の成り行きを聞かれ素直に話をした。

その時、警察から俊介を刺した女の話も聞かされた。

女は俊介を刺した後、刃物を持ったまま逃走、途中、警官にでくわし、さらに逃走しようとした時、車道に出てしまい、猛スピードで走ってきた車にはねられ、即死したらしい。

そして、俊介との関係は、同じ会社に勤めていて、何度か話をしていたみたいだが、それ以上の関係はなかったみたいだ。

ただ、警察が調べて分かった事は、女は俊介に好意を持っていたらしく、彼女のパソコンには俊介の写真が大量に保存されていた。

女の携帯電話は壊されていたが、本体自体のダメージは無く、警察がメモリを回復させると、メールの履歴内に不可解な物があった。

確かに受信はしていて、履歴は残っているのだけど、アドレスも内容も何もかも不明で、どこの誰から送られてきたのか分からない物が数件、見つかった。

警察は色々調べてみたが、結局分からず、不明のまま処理をして、この事件は終わってしまった。

葬儀も終わり、今日子はタクシーに乗っていた。

流れる街並み、俊介と歩いた街並み、今日子の瞳に涙が流れる。

ブー・ブー・ブー

携帯の着信

「だれだろう」

今日子がバックから携帯を取り出し着信の表示を見ると

「えっ？」

携帯を開きメールボックスを開くと

『更新のお知らせです』

「更新のお知らせ？」

今日子の体が震えてきた

「お客さん、大丈夫ですか？」

バックミラー越しにタクシーの運転手が今日子の姿を見て言った。

「だ、大丈夫です」

そして、更新のボタンを押してみた、すると。

『小説「K」の続編を更新しました』

「ぞ、続編？どう言う事、どうして？」

画面が下に降りていく、今日子がボタンに触れていないのに。

そして、画面が下に降り切った所にこんな事が書いてあった。

『この、小説の完結は・・・あなたの命が・・・消える時』

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5979h/>

携帯小説

2010年10月8日22時40分発行